

歯科におけるハリ麻酔の基礎的研究—特に抜歯に関するツボについて

谷 津 三 雄*

毛沢東主席の“中国の医薬は偉大な宝庫であるから、その発掘と向上とに努力しなければならない”という至上命令により各自がみづからの体を実験の場としての人体実験を積み重ね、ついに1958年上海第一人民病院で扁桃摘出術後の痛みに対し、合谷に針をうち痛みが止まったことにヒントを得て、扁桃摘出前にハリ（針）麻酔を応用して無痛手術に成功したのがきっかけとなり、無痛抜歯をはじめ顎、口腔、耳鼻科領域の無痛手術にハリ麻酔が応用されはじめた。しかし、その起源は古く黄帝内経の「靈枢」における鍼灸療法の針術から発したことはいうまでもない。宗代に王惟一が銅製の人体模型をつくり、針灸の学習をしたと伝えられているが、東京国立博物館所蔵の銅人形は国宝で室町時代に朝鮮より渡来したもので、この銅人形には全身に365カ所の穴があげられ針灸治療の治療点である経穴の所在が明示されている。

そこで歯科と関係ある経穴を古典や最新の医学にもとめ整理しておくことは歯科麻酔学上のみならず歯学史にとっても重要な課題である。

1. 本郷正豊撰 鍼灸重宝記¹⁾にみられる歯科並びに救急処置に関係ある経穴

和綴、18×12.5 cm、175丁、初版が享保3年(1718)で再版は享保20年(1735)さらに、寛延2年(1749)に誤記を正し図を多くし、図解正誤鍼灸重宝記網目と改題したことが跋文からわかる。

A basic research on acupuncture anesthesia in dentistry; especially on “Acupuncture points” in extraction of the tooth.

Nihon University School of Dentistry at Matsudo

* Mitsuo YATSU

本書は、その名の示すごとく鍼灸に関するすべての基礎および臨床にわたる事項が多く図解とともに簡単明瞭に記述されている重宝な書であるばかりでなく、その引用著書は忠実すぎるほど忠実に集録されている。

経絡要穴

頭面の部

神庭（しんてい）：驚風（子供のひきつけ）舌を吐（いだ）し人事をしらず、不寝、灸二三壮あるいは二七壮、禁針の穴。

上星（じょうせい）：頭痛、鼻ふさがり、はなぢ、針、灸。

額会（しんゑ）：脳虚冷、あるいは酒食をすぎし脳痛んで破るごとく（二日酔）風頭眩（頭がふらつく）衄血、驚悸、目眩上し、昏（くら）みて人を知らざるを治す。灸二三壮あるいは二七壮、針は禁穴。

百会（しゃくゑ）：鼻ふさがり、頭つう、目まひ、食に味なきを主る、脱肛、百病を治す。針二分又は四分、灸七壮あるいは三五壮。

風府（ふうふ）：一名舌本、はなぢ、咽喉はれ痛み、傷寒狂走、目妄に視るを治す。頭の百病、針三四分留ること三呼、禁灸りな。

瘡門（あもん）：一名舌厭、一名舌横、一名瘡門、舌急にして鼻衄止ざるを治す。針四分二分留ること三呼して瀉し、五吸にして瀉し尽す。さらに、針を留めてこれを取る。灸は禁穴。

正営（せいえい）：目眩、頭項かたかた痛み齒齦痛に針三分、灸五壮。

風池（ふうち）：温病、汗出せず、目眩、頭痛、頭項ぬくがごとく痛むを主る。針三四分あるいは七分留ること三呼、灸七壮。

懸顙（けんろう）：頭痛、牙齒いたみ、灸三壮、

針二三分、とどむること三呼あるいは七分留ること七呼。

曲鬢（きょくびん）：頤腫痛、口噤め、言うこと能わず、頸項かへりみることが得ず。針三分、灸三壮あるいは七壮。

天衝（てんしょう）：癲疾、善く驚き恐れ、頭痛、牙齦腫れいたむをつかさどる。灸三壮、七壮、針三分。

浮白（ふはく）：耳聾、耳鳴、齒痛み、胸満みて息することを得ず、喉痺、しゃくり、針三分、灸三壮、七壮。

完骨（かんこつ）：顔面腫、頭頸いたみ、齒齲、口眼喎斜を治す。灸七壮、小児は三壮、針二三分。

兌端（だたん）：上唇の赤き肉と白き肉との際め、小便黄に舌乾き消渴、はなぢ、唇強り、齒齲いたみ、鼻ふさかり、痰涎、口噤を主る。針三分、灸三壮。

廉泉（れんせん）：咳嗽、上気、喘息、舌下腫、口瘡を治す。一名舌本、結喉の上四寸推せば舌の根へ応る処。仰いで点す。灸三壮、針二三分留こと七呼、氣を得て瀉す。

頰車（きょうしゃ）：中風、牙をくひつめ、口噤んで言わず、牙痛、頰頰腫、口眼喎斜、針三四分、灸三壮。

耳門（にもん）：耳鳴、聾耳、耳瘡、齒齲、唇吻ゆがむを治す。針三分、禁灸、耳の前珠子の上、起る肉の欠けたる処、陷の中。

翳風（ゑいふう）：耳の尖の後へ下角、陷みの中を、推せば耳の中へ応へいたむ処。耳聾、耳鳴、口眼ゆがみ、頰はるを治す。灸三壮より七壮、針三分。

聴会（ちょうゑ）：耳鳴、耳聾、牙車（おとがい）脱け離れ、齒いたみ、中風口歪み、手足かなはざるをつかさどる。耳の前珠子の下少し前陷の中、口を開きて陷む処、針三分あるいは七分留ること三呼、氣を得て瀉す。灸三壮、また、毎日五壮ずつ四日の間灸して十日ほど間を置いてまた、五壮灸す。

大迎（だいげい）：口噤め開かず、頰腫、牙車（おとがい）疼むを治す。耳の下曲りたる頰の角

より一寸三分前に動脈ある骨のわれめ、口を動かせばあごのつがひめ也。

心腹の部

氣舎（きしゃ）：肩腫れて顧ること能わず、こうひ、咽腫、飲食下らず、しゃくり、癭瘤をつかさどる。天突の左右へ各一寸五分ずつ、灸五壮、針三分。

滑肉門（かつにくもん）：癲狂、嘔逆、吐血、重舌、舌二わきを治す。灸五壮、針八分。

肩背の部

大椎（だいつい）：骨熱、齒燥（うわく）を治す。脊の一の椎の上陷の中、針五分留ること三呼、瀉五吸、灸三十壮、五十壮。

厥陰俞（けっちんゆ）：欬逆、牙痛、心いたみ、胸満、嘔吐、煩悶を主る。四椎の下左右へ一寸五分ずつ針三分、灸七壮。

肘手の部

少商（しょうしょう）：頰腫、喉閉（呼吸困難）心の下満ちを治す。手大指の内側（小指の方は外、大指の方は内）爪の生ぎわを一分ほど去る。針一分留ること三呼、瀉は五吸。

禁灸

商陽（しょうよう）：喘欬、おこり、熱病汗出でず、耳鳴、きこえず、頰はれ、齒いたみ、肩背欠盆いたみ、目青く、くらむに灸三壮、目左ならば右にすべし、手食指の内（大指の方）側ら爪甲の角を一分ほど去る。針一分留ること一呼、灸三壮。

二間（じかん）：喉痺、頰腫、肩背腕いたみ、齒痛み、目黄み、はなぢ、口ゆがみ、不食、傷寒の水結（寒に傷められたために胸がみち痛む）を治す。手の食指の本筋の前（爪の方）内側ら、拳をにぎれば食指の内側、本節の前に折目出づるなり。めの頭ら陷の中也、針三分留めること六呼、灸三壮。

三間（さんかん）：こうひ、下齒を虫喰いたみ、胸腹つかえ、腸鳴、泄瀉、がんねつ、おこり、唇焦れ、口乾き目眦いたみ、舌を吐し、手食指の本節の後側、拳をにぎりて食指の内側ら本節の後にいづるありめのかしら陷の中、針三分留ること三呼、灸三壮。

合谷（ごうこく）：傷寒大に渴き、発熱惡寒づつう、背強り、汗なく寒熱おこり、はなぢ、目くらく、虫歯、耳聾、喉痺、面はれ、言うこと能わず、口噤み、中風、かざぼろせ、偏正のづつう、腰背いたみ、小兒乳鵝（小兒の咽喉に小癰生するを云う）を治す。手大指と食指との岐骨の間だ陷中推せば肘にこたえる処、灸三壮、針三分留ること六呼。

溫溜（おんる）：上気、めまい、てんかん、風逆、手足はれ、肘痛、こうひ、口舌痛、はなぢ、針三分、灸三壮。

手三里（てのさんり）：中風口ゆがみ手足かなわず、霍乱、遺失、音出でず、齒疼み、頰頰腫、るいれき、肘臂いたむを治す。曲池の下二寸推せば指の四方の肉高く起る処、針二分、灸三壮。

少海（しょうかい）：齒疼み、目まひ、発狂、嘔吐、項こわり、肘攣り、脇下いたみ、手足あがらず、脳風、づつう、心痛、呃逆（しゃくり）、るいれきを治す。肘をかがめて横文の下はづれ小指のとおり也、横文の上の尖は曲池、下の尖は少海なり。針二三分留ること三呼、瀉は五吸、禁灸。

前谷（ぜんこく）：熱病、汗出でず、おこり、てんかん、耳鳴、こうひ、頸項、頬はれ、鼻塞、咳嗽、吐後、肘いたみ、産後乳なきを治す。手小指の外側小ゆびの本節のまえにあり、拳を握れば小指の本節の前後に折目出づる、前のおりめは前谷、後の折目は、後谿なり、針一分留ること三呼、灸一壮三壮。

後谿（こうけい）：前谷の後にあり、針一分留ること三呼、灸一壮、治証も前谷に同じ。

陽谷（ようこく）：目眩、てんかん、脇いたみ、頸頰腫、耳きこえず、虫牙、小兒木舌、乳を吞まざるを、手外側の側ら小指の後外踝の下、腕の文の中、灸三壮、針二分留こと二三呼。

中衝（ちゅうしょう）：熱病いきれもだえ、汗出でず、掌の中熱し、身火の如く、心痛、舌強るを治す。心包絡の虚はこれを補す。手中指の内側、爪の生際を去ること一分陷の中、針一分留ること三呼、灸一壮。

液門（えきもん）：おこり、むなさわぎ、咽腫、

手肘いたみ、頭つう。目赤く渋り、耳きこえず、齧いたむを治す。手小指と無名指との間、無名指の本節の前にあり、拳を握りてとる、針二分留ること二呼、灸三壮。

支溝（しこう）：熱病汗出ず。かたひぢ痺れおもく、脇いたみ、手足拳らず、霍乱、嘔吐、口噤んで開かず、心悶へ、心痛、傷寒、疥癬、妊婦脈通ず、産後血暈を治す。直に陽池の上三寸兩骨の間、陷みの中、灸三壮、五壮、十四壮、針二分三分留ること七呼。

天井（てんせい）：心痛、咳嗽、上気、唾に膿血まじり、不食、寒熱臥することならず、驚悸、てんかん、中風、耳きこえず、喉痺、目じり痛み、頬はれ、耳後、肘いたみ、うちみ、腰腕、項頸いたみ、大風痛む処を知らず、心わるく、脚氣を治す。肘しりの尖骨の後一寸、兩筋の間、肘のつがひ陷みの中、針三分あるいは一寸留ること七呼、灸三壮、五壮。

腿脚の部

大敦（だいとん）：足の大指の外側爪生際を去ること一分ばかり、針三分、灸三壮、頓死を治す。（足之厥陰肝經）

大谿（たいけい）：心痛、足冷癢、喘息、痰実して口中滑（ねば）るを。足の内踝の後へ五分跟骨の上動脈ある処、針二分、灸三壮。（足之少陰腎經）

三里（さんり）：膝眼の下三寸、筋骨の外、大筋の中、灸三壮、七壮あるひは一二百より五百壮まで、針五分、八分留ること十呼、瀉すること七呼、あるいは一寸留ること一呼、腸鳴、臟氣虚し、真氣不足し、腹いたみ、喘息、腰いたみ、熱病汗出でず、嘔吐、口苦、発熱、口噤、頰腫痛み、こうひ、大小便利せず、脚氣、しゃっくり、凡そ三十已上の人は三里に灸せざれば氣上て目に沖（つか）しむ、又四花、膏盲、百会等に灸せば、後に三里に灸して上熱を下せ（足之陽明胃經）

衝陽（しょうよう）：足の跗上五寸、陷谷を去ること三寸、次指と中指との間通りを足腕の方へ撫上せば足跗の中ほどに指の止る処。灸三壮、針三分留ること十呼、もし刺して血出れば死す（この穴は衝陽の脈、動ずるところ、この脈は重病人

の生死を診ると言う) 中風、口眼ゆがみ、足収らず、跗腫、むじば、寒熱し、腹堅く大に不食し、傷寒、振寒、狂乱を治す。(足之明胃経)

内庭 (ないてい) : 足次指の外間陥みの中、灸三壮、針三分留ること十呼、傷寒汗出せず。おこり、不食、四肢厥冷、腹はり、惡寒、咽いたみ、口ゆがみ、上歯虫くい、皮膚のいたみ、鼻衄、人の声を聞くことを惡むを。(足之陽明胃経)

厲兌 (れいだ) : 足の次指の外側ら爪甲の角を去ること一二分、針一分、灸一二壮、口噤 (ひきつけ) などで堅く口を食いしばるの症を言う。水腫、熱病汗出せず、こうひ、上歯むしくひ、鼻ふさがり、はなぢ、口ゆがみ面くび腫、もも膝、跗はれいたみ、小便黄なるを治す。(足之陽明胃経)

陽陵泉 (ようりゅうせん) : 膝の下一寸、筋の外かど、膝をかがめて外側の折目のかしらより一寸下、灸三壮、七壮より五十壮まで、針六分留ること十呼吸を得て即ち瀉す。膝のびて屈まず。腿ひざ冷痺、半身遂はず、足筋攣り、頭面はるるを治す。(足之少陽胆経)

陽輔 (ようほ) : 陽交の下三寸、針五分留こと七呼、灸三壮、腰足冷、心脇、頭の角、頷、目眚、喉、諸の節ことごとくいたみ、常の処なく痠痺 (なえしび) 水不仁 (かなわ) ず、口苦く、汗出、振寒く、おこり、こうひを治す。

針灸諸病の治例

牙齒、きば、はのやまひ

夫れ齒は骨の余り、腎これを主る。上の前齒は督脈に属し、下の前齒は任脈に属す。両頤の上齦は、手の陽明大腸、下齦は足の陽明胃の經これを絡ふ。風を呷 (すう) ときは、痛みはなはだしきは腸胃に風邪あり。腫痛は陽明の風熱。臭く穢しきは腸胃に熱あり。動き揺ぐは腎元の虚なり。血火に遇うときは沸出てのびあらわる、熱極り、齒の縫より血出るは虚熱なり。蛀牙 (虫齒) は竅あり、腸胃の湿熱なり。走馬牙疳は即時に腐落る、真陰いまだ成らずして熱さかん也。

小海、合谷、内庭、四瀆、上廉、大淵、三間、浮白、陽白。齒痛まば商陽。牙痛ば陽谿、少海、曲池、陽谷、二間、厲兌。上牙痛には人中、内庭、大淵、呂細 (太谿)、少海、三里、又肘の上、

肉の起るところに灸して妙なり。下齒いたまば、竜玄側腕交叉 (陽谿)、承漿、合谷、三間、又腕くびより五寸上、両筋の間に灸五壮して妙なり。血熱胃口にあり、咽齒に引きいたむには浮白、内庭、合谷。頬腫れ牙いたまば、頬車、曲池、虫牙にはいたむ牙のとをりの齦に刺すべし、妙也。虫喰牙にて瘡を生じ、ただるものは承漿に灸七壮すべし。牙疳は承漿に針灸。

唇病

經曰く、脾の榮は唇にあり、唇潤 (うごく) は風也。乾くは燥なり。裂 (さくる) は熱なり、揭 (そる) は寒なり、唇腫裂、あるひは瘡を生じ、米泔のごとくなるは瀦という、脾經の風熱也。唇緊 (すくみ) 口小さくなるを、緊唇 (きんしん) といふ。又中氣虚損して唇口瘡を生ずる者あり、又陰虚火動して唇燥き裂けて藁の如くなる者あり。唇乾き液あるは、下廉。唇乾き食下らざるには三間、少商。唇動き、虫の行 (は) うがごとなるは水溝。唇腫れば迎香、緊唇は虎口を灸す。男は左、女は右又承漿。(二灸三壮すべし)

口病

經に曰く、脾氣は口に通ず。肝熱すれば口酸し。心熱すれば口苦し。胆熱するときも口苦し。脾熱すれば口甘し。肺熱すれば口辛し。腎熱すれば口鹹し。口臭きは内熱、口乾き口瘡は脾熱。口乾は尺沢、曲沢、大陵、二間、少商、商陽。口噤には、頬車、支溝、外関、列欠、厲兌、内庭。口眼喎斜は、頬車、水溝、絲竹空、列欠、太淵、合谷、二間、地倉。

舌病

舌は心の苗也、又脾の經絡、舌の本に連る。惟 (ただ) 舌の下、廉泉の穴は、腎經に属す。故に心熱すれば舌腫れ、瘡を生ず。心脾熱を重ねて言語わず、心脾虚して風熱をうけ、氣鬱して重舌を出す。心脾熱して、舌胎を生ず。肝ふさがれば血を出す。上に鬱熱をたくはゆるときは、口舌のやまひを生ず。舌緩 (ゆるまわる) は太淵、合谷、冲陽、内庭、風府、三陰交、崑崙、舌強は、亜門、二間、少商、魚際、中冲、陰谷。舌黄は魚際。

鼻病

鼻は肺の候なり、和するとき、よく香臭を分別す。若し、七情内に鬱し、六淫外を傷り、飲食勞役して、鼻氣調はず、清道ふさがりて、病をなす。鼻塞り、濁涕（あおばな）を流すは熱邪とし、清涕（みずばな）を流すは寒邪とす。香臭を聞かざるは、肺に風熱あり。濁涕、あるひは、清汁をながして止ざるを、鼻淵といふ。乃ち風熱腦をやぶり腦氣固からずして、液をのづから滲る也。臭き膿水、ながれ出るを、腦漏といふ。面白く、清涕をながし、香臭を聞かざるは、肺虚なり。鼻赤きは、熱血肺に入る、酒皰鼻（しゅさび）といふ。鼻頭、紫黒きは、風寒によって、血冷凝滯して散ぜざるなり。みな症を詳にして治すべし。

百会、上星、肺俞、風門。鼻塞るは上星、臨泣に針し、上星七壯、百会、厲兌、前谷、に灸すべし。清涕は人中、上星、風府、又風門、に灸。腦漏、臭き涕出ば曲差、上星。久病涕ながれて止まば、百会に灸して妙なり。息肉には迎香。衄血は風門、風府、風池、合谷、二間、三間、後谿、前谷、委中、申脈、上星、三里、鼻瘡は上星、百会、風府。

咽喉 のんどのやまひ

喉は肺に通じて、氣の往来を主どる。氣、鬱結して、上にのぼり、頸の間に血熱をたくはへ、血余りて喉痺を病む。又手の少陰、少陽の二脈も、喉氣に並ぶ、火は腫脹を主る、故に熱。上焦に客して咽隘はるる。或は、腫れ痛み、或は瘡を生じ、あるひは紅にはれ、結核、腫れいたみ、或は閉塞り言うこと能わず。俱にこれ風熱、痰火なり。

尺沢、瘰癧門より血をとる、口を開かせて喉の腫れたる所をひねり針にて突ぬき、血をとるがよし。あるひは喉閉、急症には、三稜針を少商に刺て、毒血を出すべし。喉痺には夾車、合谷、経渠、大陵、二間、尺沢、前谷、陽谿。頤腫には少商。咽痛まば風府、妙なり。咽の中、鰓（うおのほね）の如くいらつくには間使、三間。咽腫ば中渚、大谿。咽の外はるるには液門。食下らずは膈中に灸せよ。咽の中ふさがるには合谷、曲池。又ふさがりて飲食下らざるには、合谷、少商。咽乾くは大淵、魚際（ぎょさい）。消渴には水溝、行

抜歯常用穴

- (1) 体穴：三間から合谷へ透刺（患歯反対側）
合谷（両側）
- (2) 顔穴：患歯側
上顎前歯：人中から迎香へ透刺、下関
下顎前歯：承漿から大迎へ透刺、頰車
上顎小白歯：下関、顴髎
下顎小白歯：承漿、頰車、下関
上顎大白歯：顴髎、下関
下顎大白歯：承漿、下関から頰車へ透刺

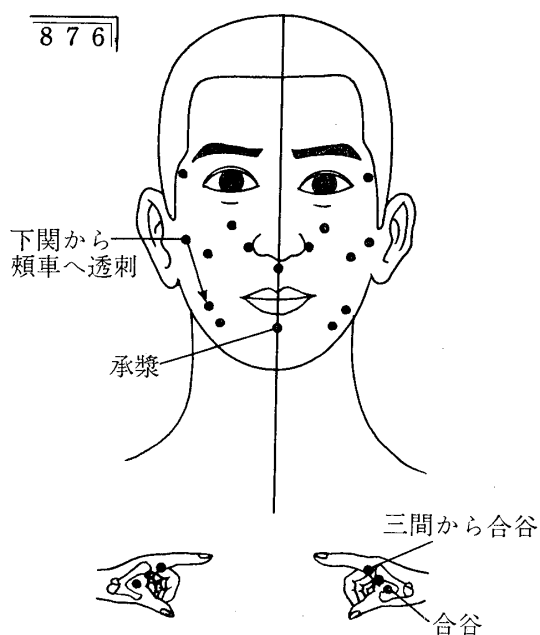


図 1

間（こうかん）、曲池、承漿、然谷、商丘、隱白、労宮。

2. 第19回日本医学会総会シンポジウム（1975年4月）—針麻酔の臨床と基礎²⁾

福島²⁾は「歯科領域の針麻酔」と題し227名の針麻酔による抜歯を行いその常用穴について表1、図1図のごとく選穴している。するわち体穴は患側の合谷および三間から合谷への透刺を基本とし合谷を刺激した場合、体のいろいろの部分に麻酔効果が得られるが、主に顔に特異的に現われ歯科および耳鼻科領域の手術の針麻酔に合谷が必ず使用される理由をあげている。部位別抜歯の常用穴に上顎犬歯は下関と人中から迎香への透刺、上顎切歯は四白と人中から迎香への透刺、上顎臼歯は下関と顴髎、下顎前歯は承漿から大迎への透

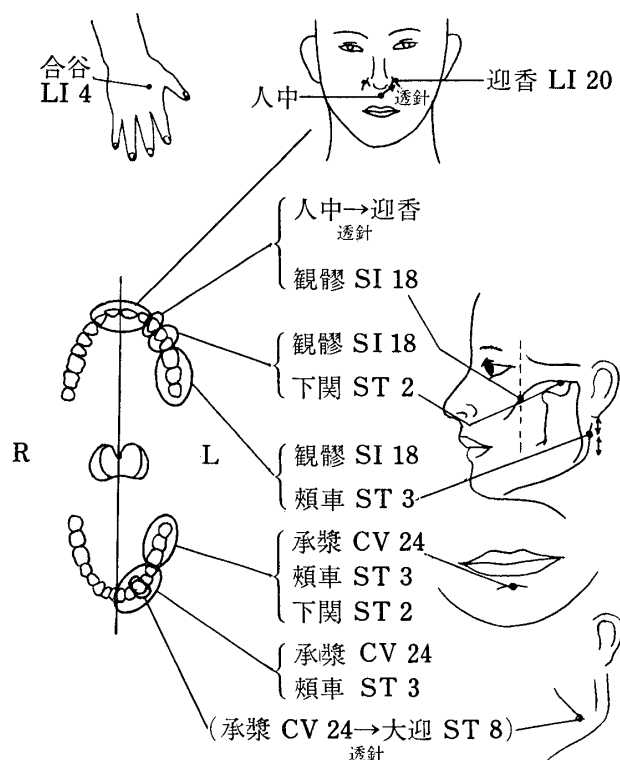


図 2

刺と頰車，下顎小白歯は承漿，頰車および下関，下顎大白歯は承漿と下関から頰車への透刺などが効果的であったとしながらも，上下前歯の抜歯は白歯に比較し麻酔効果を得ることが難かしく，また針麻酔の作用に関して経穴の存在は明らかに“得氣”を得た場合の無痛効果は，得氣を得なかった場合の数倍であったと報告し，また池園²⁾は「針麻酔臨床の現況」で右下顎の埋伏智歯の抜歯を右合谷，左手三里に置針し20分3 Hz 間通電の針麻酔下で行った結果は粘膜切開，縫合は無痛であったが，骨膜剝離，歯髓操作には局麻の追加が必要であったとし，前頸部の手術では前頸部を通る大腸経，胃経の遠隔点，すなわち手の合谷または足三里などに取穴する。また，大腸経，胃経は頰部，口唇から上顎，下顎を通るので，口唇部の手術，抜歯術に広く用いられる経穴であるとし，さらに上顎洞炎根治術には，体針に合谷（手背1.2中手骨間），外関（前腕後面）足三里（脛骨粗面の外側），巨膠（鼻唇溝の外側）などを取穴，それに上顎，腎，交感などの耳針の組合せがよいと述べている。

代田²⁾は「耳鼻咽喉科領域の針麻酔」で「経絡のうち，鼻，上顎洞付近を経絡がめぐる胃経と大腸経の上で，術野から離れた四肢上に点を求め，遠隔から刺激することを第一に考え，その理由として，経絡上で術野に近いところを刺激すると，筋肉の攣縮により術野が動き，術者がやり難いこと，出血が遠隔からのものより多いこと，痛覚閾値を測定してみると遠隔の方がより高くなる場合が多いとし，一番頻用され効果があるのは手三里一合谷（大腸経）足三里一内庭（胃経），肺一内鼻（耳の点）であると報告している。

3. 第2回日本歯科麻酔学会における特別講演 （昭和49年10月30日）—歯科領域における ハリ麻酔とペインクリニック³⁾

わが国におけるハリ麻酔の第1人者である兵頭正義教授は中国の経験にならって図2に示すごとく処置する歯によって局所的選穴部位を変えるか「合谷」はすべての場合に必ず取穴する。しかし顔面部に取穴して低周波を通電すると顔筋の twitching のため操作がやりにくくなることもあるので，ときに「合谷」だけの選穴を行う。この「合谷」だけでも効果があるので簡単にハリ麻酔を行いたい場合は「合谷」だけの選穴でよいとしながらも，合谷の刺針は得氣をうまく出さなければならず最も痛いと表現するところにうまく針の尖があたるように患者の表情を見ながら最も得氣が強くでる一点をさがし置針しなければならないと強調している。

3. 歯界展望（第42巻第5号，昭和48年11月） 特集 ハリ麻酔⁴⁾

佐野⁴⁾は抜歯常用穴を中国医学研究会の資料を参考とし上顎前方の歯……合谷（両側または片側），四白（患部側），上顎後方の歯……合谷（両側または片側），太陽，下関から頰車に透刺（患部側），下顎前方の歯……合谷（両側または片側），承漿（患部側），下関，頰車（患部側）とし，また片山⁴⁾は保存修復処置のためのハリ麻酔の取穴に，(1) 体穴：三間から合谷へ透刺（患歯反対側），合谷（両側），(2) 耳穴：珠先，神門（患歯側），(3) 顔穴：（患歯側）上顎切歯：承漿，頰車，上顎犬歯：人中から迎香へ透刺，下顎前

歯：承漿から大迎へ透刺，頰車，上顎小臼歯：下関，観膠，下顎小臼歯：承漿，頰車，上顎大臼歯：観膠，頰車，下顎大臼歯：承漿，頰車，下関などをあげているが，上下顎の小臼歯が特によくきいたが，下顎前歯では完全麻痺は得られなかったと述べている．また，高橋⁴⁾は症例により，合谷，三間，下関から頰車への透刺，えい風，承漿，耳朵を適宜に組合せて行っている．

考証

経穴は何千年という歴史を経て，経験的に定められたものであるが，解剖学的には筋肉，関節部の凹窩神経が筋肉から出る所，神経の幹部，血管の隣接部などであるが，なお不明な部位も少なくない．長浜⁵⁾は「経絡や経穴は実際に鍼灸を行うに当って存在する機能的現象である」と述べており，針麻酔には絶対かかせない治療（刺激）点ではあるが解剖的に説明し難い点が多い．

中谷⁶⁾は生理学的には経穴のほとんどすべてが通電抵抗の低いことを交感神経の機能面から明らかにし，経穴の代りに良導点と呼び，また古来から経絡というのは経穴を結ぶ連絡路であり“針のひびき”（得気）や実際の治療効果の上から推測された一種の体液路，または“気の流れ”と考えられており，身体のある器官または機能に異常が起こると体壁のある部位が過敏または鈍麻となり，この異常反応点と特定の器官または機能が一定の関係をもつことが示され，この体表上に出現する反応点を結ぶ身体を縦走する線を経絡と呼び，この経絡は左右対称性の大腸，胃，脾，三焦，心包，小腸，心，胆，肝，膀胱，腎経と呼ばれる経絡と，身体の前後面の正中線を走る任脈，督脈とがあり，これらを総称して14経絡といい針麻酔（治療）を行う上で基本となるものである．

この経絡の走行を考えれば遠隔から特定の臓器の治療を行うことができるのであるが，この経絡も特定の疾患時に特にはっきりと浮び上がる幾つかの良導点の連結線であることを通電抵抗から明らかにし，中谷⁶⁾はこれを良導絡と呼ぶことによって従来の経絡に新しい解釈を下し，経穴や経絡について科学的なうらづけを行っているが，この良導点や良導絡の発見は麻酔史上特筆されてよ

い．中谷⁶⁾は，上歯痛の場合には F₄50（厥陰俞）付近に反応良導点および圧痛点のことが多くこれらの点に刺針すると多くは止痛する，それに F₆42（客主人）や F₆41（下関）を加えるとほとんどの上歯痛は鎮痛するが，それでも頑固なものには H₅30（耳門），F₆2（内庭），H₆10（手三里）を加えるか F₆42（客主人）に十分時間をかけて雀啄電気針を行う．下歯痛の場合は F₆42（客主人），F₆41（下関），H₅20（翳風）の少し前 H₆7（温溜），H₆4（合谷），H₁6（孔最）に電気刺激，また奥歯痛には F₄51（膏肓），F₆2（内庭），H₁6（孔最）を加えるとよく鎮痛するし，また歯槽痛には H₆10（手三里）を加える．また歯槽膿漏や歯根膜炎による歯痛に対しては F₄50（厥陰俞），F₆41（下関），F₄42（客主人），F₄59（天柱），H₅20（翳風）特に F₄50（厥陰俞），F₆41（下関）は下歯痛に，F₆50（巨髎）は上歯痛に効果がある．なお直接疼痛のある歯肉に刺針し通電するとさらにより止痛になると述べている．

結び

ハリ麻酔（治療）を行う上で最も重要なのは選穴と得気を得るような刺針の技術である．歯科と関係ある経穴について古典を代表し鍼灸重宝記，最新医学からは第19回日本医学会総会シンポジウム，第2回日本歯科麻酔学会特別講演および歯界展望，ハリ麻酔特集号より抜歯や歯痛に最も効果のある選穴は合谷を主とし，温溜三里の体針に，下関，頰車，四白，観膠，大迎などであった．

文 献

- 1) 本郷正豊撰：鍼灸重宝記，初版，享保3年(1718)再版，享保20年(1735)三版，寛延2年(1749)．
- 2) 池園悦太郎編：針麻酔の臨床と基礎．第19回日本医学会総会シンポジウム（1975年4月）克誠堂，1975年12月．
- 3) 兵頭正義：歯科領域におけるハリ麻酔とペインクリニック．日本歯科麻酔学会雑誌，第3巻第1号 1～14p，1975年．
- 4) 佐野，茂田，片山，高橋ら：特集 ハリ麻酔，歯界展望，第42巻第5号 680～690p 昭和48年11月．
- 5) 長浜善夫：針灸の医学．創元社，昭和43年．
- 6) 中谷義雄：良導絡．自律神経調整療法．良導絡研究所，1971年9月．